

氏名	佐藤 由美子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 3307 号
学位授与の日付	平成19年3月23日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病体制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Deviated VH4 immunoglobulin gene usage is found among thyroid mucosa-associated lymphoid tissue lymphomas, similar to the usage at other sites, but is not found in thyroid diffuse large B-cell lymphomas
(甲状腺MALT lymphomaでは、他の臓器のMALT lymphomaと同様免疫グロブリン遺伝子がVH4に偏っているが、甲状腺 Diffuse large B-cell lymphoma では同じ傾向がみられない)

論文審査委員 教授 谷本 光音 教授 松川 昭博 助教授 大橋 俊孝

学位論文内容の要旨

節外性の Diffuse large B-cell lymphoma (DLBCL) は MALT lymphoma から発生しているという仮説があるが、いまだはっきり示されていない。我々はこの2つの lymphoma の関連をみるため、免疫グロブリン遺伝子の VH usage を検索し、甲状腺 MALT lymphoma と DLBCL の臨床病理学的な特徴を調べた。また、multiplex RT-PCR 法を用いて t(11;18)(q21;q21)の転座の有無も確認した。甲状腺原発の悪性リンパ腫 58 症例、{MALT lymphoma 31 例 (男性 7 例、女性 24 例) と DLBCL 27 例 (男性 3 例、女性 24 例)} を調査した。興味深いことに免疫グロブリンの VH4 family 使用において両者に有意差を認めた。7 例の MALT lymphoma のうち 3 例は VH4 を、4 例は VH3 を使用していたのに対し、DLBCL では 9 例中 8 例が VH3 を、1 例は VH1 を使用しており VH4 は 1 例にも見られなかった。さらに、MALT lymphoma と DLBCL が混在していた 1 例において、DLBCL component は VH3 を使用していたのに対し、MALT lymphoma component は VH4 であった。この結果によって、一部の症例では MALT lymphoma と DLBCL は連続した病変ではなく、DLBCL は de novo で発生している可能性が指摘された。t(11;18)転座は 1 例にも見られず、他臓器との違いが明らかになった。t(11;18)の頻度は臓器特異性があると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究では甲状腺原発の悪性リンパ腫のうち、MALT リンパ腫と DLBCL との関連について、遺伝子レベルでの相同性を用いて検討している。具体的には 31 例の MALT リンパ腫と 27 例の DLBCL について、免疫グロブリン VH 領域を調べて、MALT リンパ腫では VH4 の使用が有意に多いこと、一方 DLBCL では VH3 が多く VH4 は認めなかったこと、1 例の両リンパ腫の混在する症例では、MALT リンパ腫部位で VH3 を、DLBCL 部位で VH4 を検出したことなどから、MALT リンパ腫と DLBCL は互いに関連はなく、各々が独立して発生する疾患であることを証明している。甲状腺原発リンパ腫の起源を探る研究であり、病因論からも貴重な知見と考えられる。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。